

第3回検討会資料（松田：2014. 10. 10）

■■プリテストの結果の評価について

■Q2の選択肢変更の影響について

《前提条件》

- 割当法である …………… 単純に%数値の大小を比較して判断できない
- サンプルサイズが小さい …………… 無作為抽出に準じると仮定しても有意差判定が難しい
- 調査員コメントは参考になる … 一人でも回答者がそう感じたとうことには、改善の余地がある

《仮説別の検討》…ここでは調査員バイアスは考慮しない

① 「調査票AとB両方の対象者は同質である」と仮定した場合

（極めて精度の高い無作為抽出に匹敵する割当が達成できたと仮定した場合）

- (Q2) A「死刑は廃止すべきである」8.2% 「死刑もやむを得ない」89.0%
B「どんな場合でも死刑は廃止すべきである」8.2% 「場合によっては死刑もやむを得ない」87.7%
→ の結果から選択肢の違いは、Q2の回答比率に大きな影響を及ぼさないといえる。
(SQ2a1,a2)についてはともに対象者6票と少ないため、選択肢変更による影響について議論できない
(SQ2b1,b2)については対象者がA=65、B=64票のため、選択肢変更による影響についての議論は可能
(SQ2b1)「凶悪な犯罪は命をもって償うべきだ」A=73.8%(48票)、B=54.7%(35票)と大差
→ 「どんな場合でも」「場合によっては」のある無しの影響が出たと見なければならない
→ 調査票Aのほうが多く選択する傾向がある（すべての選択肢でBより票数が多い）
→ 調査票Aのほうは「場合」を想定しないで回答したため、ここで多く選びがち？
(SQ2b2)「将来も死刑を廃止しない」A=60.0%(39票)、B=53.1%(34票)で差はない（小さい）とみる
→ (SQ2b1)のような具体的回答ではなく判断を求めるものなので「場合」の影響なし？
(Q3、Q4)についてはQ2の選択肢変更による影響は無いとみる
◆調査員の視点＝「どんな場合でも」「場合によっては」に戸惑いあり、Aが答えやすい、の指摘あり。
→ 「戸惑い」「答えにくい」という短所なのか、考えてもらえているという長所なのか。後者の可能性？

② 「調査票AとBの対象者は異質である」と仮定した場合

（割当および少数サンプルによる対象者の偏りが発生していると仮定した場合）

- (Q2) A「死刑は廃止すべきである」8.2% 「死刑もやむを得ない」89.0%
B「どんな場合でも死刑は廃止すべきである」8.2% 「場合によっては死刑もやむを得ない」87.7%
→ の結果から選択肢の違いは、Q2の回答比率に影響を及ぼすといえる。
（異質な対象者なのに同じ結果になるなら、質問文のバイアスにより一致したことになる）
対象者がAとBで異質と仮定したのだから、(SQ2a1,a2)や(SQ2b1,b2)、(Q3)(Q4)での%数値の差により選択肢文変更の影響を議論しても実りは少ない。むしろ逆に、
→ (SQ2b1)で調査票AとBに大きな違いがあるのは、Aの対象者は死刑存続派が多く、Bでは廃止派が多いというサンプルの偏りがあると仮定できる
→ (SQ2b2)で調査票AとBに小さな違いがあるのも、Aの対象者は死刑存続派が多く、Bでは廃止派が多いという上記仮説に沿う
→ (Q3、4)においても上記仮説に沿う結果になっている

このプリテストでは、Aは存続派、Bは廃止派多めという仮説が正しいとすると、Bでは廃止派が多めという偏りがあるにも関わらずAと同じ8.2%になったのは、完全性を強調する「どんな場合でも」という説明があることで、そこまでは言い切れないとして「どんな場合でも」を避けて「場合によっては」に流れた可能性がある。結果として、AとBで「死刑廃止」が同率となってしまったとみる。

■Q4の評価について

質問文、選択肢文ともに改善の余地がある。「廃止した方がよい」ではなく「**廃止する方がよい**」。「廃止しない方がよい」は二重否定で分かりにくいので「存続」などの表現のほうがよい。

《改善例》→ もし、仮釈放のない「終身刑」が新たに導入されるならば、死刑を**廃止する**方がよいと思いますか、それとも、終身刑が導入されても、死刑を**存続する**方がよいと思いますか。

「廃止することに賛成ですか、反対ですか」などいろいろ表現の再検討をして戸惑いを減らしましょう。